

九州支部

査で確定診断に至らなかったが悪性を疑い、迅速診断併用で開胸。肺靭帯内にφ7mmの横隔膜を貫き上行する異常動脈を認め、肺分画症と診断。異常動脈結紮の上、肺底区々域切除を施行。

8. 肺癌開胸時の胸腔内洗浄液の検討—とくに洗浄液中のCYFRA21-1について—

佐世保市立総合病院外科

南 寛行, 原 信介, 佐々木伸文
石川 啓, 三根義和, 吉田一也
田口恒徳, 國崎真己, 河野文彰
中村 讓

【目的】肺癌開胸時の胸水洗浄液中のCYFRA21-1(以下シフラ)を測定し、その有用性について検討した。【対象と方法】1997年2月より1999年12月までの肺癌切除181例中、開胸時に胸腔内癒着を認めない130例を対象とした。方法は開胸時に胸腔を100mlの生食水で一分間洗浄し、回収液の細胞診検査とシフラ測定を行った。【結果】1) p=2症例ではp=0, p=1症例に対し、有意にシフラ高値であった。2)細胞診陽性例は陰性例に比べてシフラ高値の傾向がみられた。

9. 良性肺疾患にみられた異型気道上皮の分子生物学的検討

九州大学胸部疾患研究施設

井上孝治, 中西洋一, 高山浩一
出水みいる, 肝付兼仁, 綿屋 洋
南 貴博, 原 信之

【目的】良性肺疾患にみられる異型上皮が、肺癌患者にみられる異型上皮と分子生物学的に異なるか否かを検討した。【対象と方法】対象はTBB標本中に異型上皮を有する103症例で、3p, 9pのLOHの有無を検討した。【結果】3p, 9pのLOHはIPFで高率に認められた。【考察】原疾患に関わらず異型上皮においては遺伝子異常が存在し、発癌の過程を理解する上で重要と考えられた。さらにK-rasの遺伝子変異についても検討を加える予定である。

10. 肺異型腺腫様過形成(AAH)の2切除例

九州大学医学部第二外科

庄司文裕, 杉尾賢二, 古賀孝臣
山崎宏司, 加瀬真一郎, 隠土 薫
山口正史, 杉町圭蔵

同 第一病理

居石克夫

症例1は64歳女性。右上葉に径20mmの淡い結節影を認め、肺癌疑いにて右上葉切除を行い、病理学的にAAHの診断となった。症例2は41歳女性。右下葉に腺癌と右上葉に径5mmの結節影を2個認めた。下葉切除と上葉部分切除を行い、上葉の1個はAAHで1個は腺癌であった。2症例のAAH病変は術前胸部X線で描出不可であり、CTでのみ描出可能であった。病理学的にAAHの診断が得られれば、縮小手術とすべきである。

11. 両側肺に同時多発したnon-invasive BACの1例

熊本大学医学部第一外科

吉岡正一, 森 毅, 渡邊健司
西山康之, 磯貝雅裕, 平岡武久
同 第一内科 坂田一郎, 岡本竜哉
松本充博, 安藤正幸

49歳、女性。検診で右上肺の異常影指摘。HRCTでrS1, rS2, rS9, lS3に径5~20mmの異常影あり。胸腔鏡下右肺部分切除術を施行。3病巣共に野口A・B型の肺胞上皮癌であった。当初は、pT1N0M1, pStage IVと考え、術後2回の抗癌化学療法を行ったが、効果NCで、他の遠隔転移もないため、左肺上葉切除術施行。野口A型の肺胞上皮癌であった。野口A・B型肺癌は、他臓器・リンパ節転移を殆ど起こさないこと、臨床経過から、両側同時多発癌と推定された。

12. Pleomorphic carcinomaと診断された早期肺癌の1例

栄和会泉川病院

久松 貴, 貝田英之, 泉川公一
泉川欣一, 原 耕平
長崎大学医学部第1外科

長谷場仁俊, 村岡昌司, 永安 武
赤嶺晋治, 岡 忠之, 綾部公懿
長崎大学附属病院病理部

安部邦子, 林徳真吉

症例: 40歳の男性で自営業。平成11年11月の健診で異常陰影を指摘され、同年12月3日本院を受診。胸部レントゲンで右上肺に2.0×1.5cm程の小結節を認めspiculaやpleural indentationを認めたことから腺癌を疑い、外科に紹介して、平成12年1月6日

手術を行った。組織所見にて新WHO分類の大細胞癌の関連組織型であるpleomorphic carcinomaの診断を得た。大きさは2cm以下で、進展度はT₁N₀M₀で、stage 1Aの早期癌と考えられた。

13. 胸腔鏡補助下肺葉切除を行った肺腺扁平上皮癌の1例

国立熊本病院外科

西岡涼子, 山下眞一, 中川真英
平野祐一, 芳賀克夫, 水谷純一
片瀨 茂, 池井 聰

肺の腺扁平上皮癌は原発性肺癌の約2~6%を占めるといわれている。今回我々は腺扁平上皮癌の1例を経験し胸腔鏡補助下肺葉切除を行った。症例は69歳、男性で術前の臨床病期はT₂, N₀, M₀ Stage Ibの右下葉原発の肺癌であった。平成11年7月9日胸腔鏡補助下右下葉切除、リンパ節郭清を行った。術後経過は良好で現在も再発無く生存中である。腺扁平上皮癌の臨床病理学的考察を加えて報告した。

14. 末梢型肺カルチノイドの2例

国立療養所沖繩病院外科

大田守雄, 濱田利徳, 知念徹治
竹島義隆, 河崎英範, 平安恒男
川畑 勉, 国吉真行, 石川清司
源河圭一郎

肺カルチノイドは比較的稀な腫瘍で肺腫瘍中約1~2%の頻度である。今回、われわれは当科で経験した末梢型肺カルチノイドの2例について報告する。【症例1】35歳、女性。左上葉S⁶に4×4cmの腫瘍を認め部分切除を施行。定型的カルチノイドと診断された。【症例2】73歳女性。左肺上葉S⁶に0.9×0.8cmの腫瘍で胸腔鏡下に部分切除を施行。術中迅速検査でカルチノイドと診断。【まとめ】末梢型カルチノイドは縮小手術可能な症例が存在する。

15. 経過中に大咯血をきたし、剖検にて明らかな腫瘍を認められなかった悪性胸膜中皮腫の1例

熊本大学医学部附属病院第一内科

伊東猛雄, 平田奈穂美, 山本太郎
坂本 理, 坂下直美, 猪山賢一
松本充博, 安藤正幸

症例は80歳男性。以前より左下葉陳旧性肺結核病巣からの咯血で入院院